

かべにきえる少年

手島悠介

絵 岩瀬慶造



かべにきえる少年

手島悠介・作
岩瀬慶造・絵



913

手島悠介

かべにきえる少年

講談社 1976

205p 22cm (児童文学創作シリーズ)

てしまゆうすけ

かべにきえる少年

昭和51年8月4日 第1刷発行

作 者 てしまゆうすけ
手島悠介

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 郵便番号 112

電話 東京03(945)1111(大代表)

振替 東京 8-3930

印刷所 廣済堂印刷株式会社

双美印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

© 手島悠介 1976 Printed in Japan

落丁本・乱本はおとりかえいたします。

定価は箱に表示してあります。(児一)

もくじ



第一章 ふしぎなかげを見た

いなずまの光る日

じっと見ている

あれは、死に神？

第二章 ひとみのない男たち

おとうさんの見まい客

かげの少年の声が

希子という名まえには

第三章 とけてきたなぞ

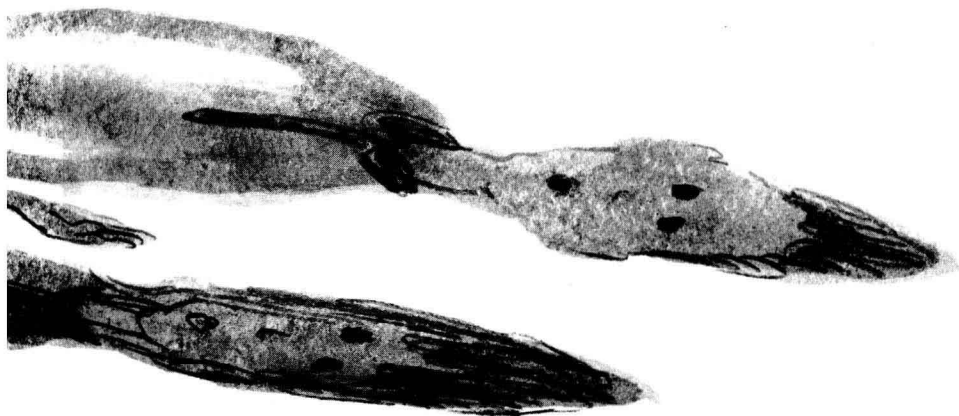
あとをつけるジープ

光の世界、かげの世界

実おじさんの心配

「原爆の子」

92 85 69 59 59 45 36 27 27 18 12 7 7



第四章 だいしやう かげたちの集会 しゅうかい

晴れた病室で びやうしつ

「ひる」と「よる」と

真夜中 まよなか 中のびる手

第五章 だいしやう 黒いたくらみ

かげをねらう爆弾 ばくだん

希子 のりこ は広島 ひろしま へ

ドームにしのびよるもの

流れる黒い血 ち

第六章 だいしやう 水ヲクダサイ

あの日、がいま……

目をとじてはいけない

おわりに

204 189 179 179 175 153 145 134 134 127 106 99 99



かべにきえる少年



げんしばくだん

げんしばくだんがおちると
ひるがよるになつて
人はおぼけになる

坂本はつみ（小学校三年）

詩集「原子雲の下より」昭和二十七年

第一章 だいいしやう

ふしぎなかげを見た



いなずまの光る日

花屋はなやさんの店からでると、きゆうにくらくなってきた空が、ぴかっとかぎざきのようににきました。やがて、遠くひびく、かみなりの音。

(夕だちがくるのかしら?)

四年生の北条希子ほうちょうのりこは、つつんでもらったばかりのばらの花たばを、だくようにしっかりと持もつと、横断歩道おうだんをいそぎ足でわたって、都北病院とほくびやういんの門をはいりました。

すずしい風が動うごいて、真夏まなつの昼さがりの、いままでのあつさが、すうつとふきとばされていくようです。

病院のろうかには、青白いけい光燈がともっていました。希子は三階の、おとうさんのねて
いる病室まで、エレベーターを使わず、階段をのぼっていくことにしました。

二階までくると、「第二手術室」とかかれた、へやのドアが見えました。希子は、なにかこ
わいような、せかれるような気持ちになって、いそいで、三階にむかいました。

やっと、三階です。おとうさんの病室は三〇三号室。階段のすぐ近くにあります。
ろうかにでたところで、希子は、思わず、どきんとしてしまいました。なにかが、希子の足
もとを、さつと走りぬけたのでした。

「まあ、いぬ……。」

そういいかけて、希子は、もういちど息をのみました。

一ぴきの大きな黒いいぬ、セパードのようなそのいぬは、階段をすべるように走りおりてい
きながら、ふいに、きえてしまったのです。

そのとき、またもや、きみのような動くものが、ろうかにふわりとあらわれました。希子は目
を大きく見ひらいて、身動きもできずに立ちすくんでいました。なんどめかのいなすまが光
り、目をさすようなかがやきが、階段のまどを明るくして、すぐにきえました。

そのきみような動くものは、三〇三号室のかべのあたりから、ゆらゆらと歩いてきます。
白っぽい、目も鼻もない、小さなかけのようなものです。きらきら光る水蒸気を、子どもの



形に切りとった、といったほうが、わかりやすいかもしれません。

白いかげは、希子^{のりこ}に気がついたように、ふと動^{うご}かなくなりました。希子^{のりこ}は、おそろしさに、いまにも、からだがふるえだしそうでした。いったい、なにものなのでしょう……？

三年生か四年生ぐらいの子どもの人かげ、ということはわかります。でも、男の子なのか、女の子なのか、はつきりしません。

希子^{のりこ}はいまにも、ひめいをあげそうになりました。すると、その人かげは、つと、たおれるように動^{うご}いて、希子^{のりこ}のすぐ目のまえのかべの中に、すいこまれるようにきえました。

また、いなくが走って、ろうかのつきあたりのまどが、青白く光りました。

希子^{のりこ}はぞくつとして、おとうさんの病室^{びやうしつ}のドアをいそいであけると、へやの中へとびこみました。ベッドの上のおとうさんと、そばにすわっているおかあさんが、おどろいたように希子^{のりこ}を見ました。

「どうしたの？ そんなにあわてて……。」

おかあさんがいいました。

希子^{のりこ}は、ベッドに横^{よこ}になっっているおとうさんの、青ざめた顔を見つめました。病気^{びやうき}のおとうさんに、へんなことをいって心配^{しんぱい}かけてはいけないと、希子^{のりこ}は思いました。

「すてきなばらでしょう。一本おまけしてもらったのよ。」

おとうさんが、かすかにわらったようでした。おかあさんがいすから立って、ばらの花たばをうけとり、へやのすみの流しで、花びんに生けはじめました。

「ぐあいは、どう？」

希子は、むねのふるえをかくしながら、おとうさんにたずねました。

「ああ、きょうはとてもいい。きょうは輸血をしなかったんだよ。」

希子は、いまろうかで見えたものを、まざまざと思いだしていました。でも、この病室へはいつてしまうと、いま出会ったおそろしいことが、うそのように思えてきます。

「希子、顔色がわるいんじゃない？」

まどぎわのつくえの上に花びんをおきながら、おかあさんがいいました。

「うん。かみなりがこわかったの。ほら、また光った！」

「あんな遠くのかみなりをこわがって、どうするんだい。」

おとうさんが、からかうようにいいました。その声のひびきは明るく、希子は、おとうさんの病気がよくなつてきていることを感じて、うれしく思いました。

「きれいなばらだ。……もう、おかあさん、きょうは帰りなさい。夕だちのこないまえに。」

「おとうさんの夕飯が終わってからにするわ。」

まどの近くに立ったまま、おかあさんが答えました。

また、ぴかりときて、ピンクのばらが、いっしゅん、うすむらさき色にかわったように見え
ました。

じつと見ている

つぎの日、八月一日――。

希子^{のりこ}は、家のそばのバスの停留所^{ていりゅうじょ}に立っていました。空は晴れあがって、午前十時ごろだとい
うのに、もうあせばんでくるようです。

きょうは、おかあさんがパートタイムのおつとめにいつているので、希子^{のりこ}が一人で、おとう
さんのお見まいにいくのです。手にさげた大きな紙ぶくろには、きれいにあらったおとうさん
のパジャマと、プリンスメロンがはいっています。

希子^{のりこ}はとつぜん、男の子の声で、

「北条さん……。」

とよばれて、ふりかえりました。

同級生^{どうきゅうせい}の野田健一^{のだけんいち}が、だいじそうに、たけのバスケットをだいて立っていました。

「野田^{のだ}くんもバスを待つてるの？」

「うん。獣医さんのところへいくんだ。」

「獣医さん？」

健一は、バスケットを、心配そうにかかえなおしました。

「この中に、いぬのボブがはいってるんだけど、けさ、すごくもどちゃってね。弱ってるんだ。」

「ボブって、小さいぬなの？」

「もう年よりさ。ぼくと同じ年なんだもの。マルチーズのおすなんだけど……。」

健一の太いまゆ毛は、右と左がくつつきそうですが、そのまゆ毛が心配のために、いつそうせばまって見えます。

希子は、同じ学級委員である健一の、いつもかっぱつにものごとをすすめていくすがたしか知りませんでした。こうして、いぬのために心をいためているようすを見て、

（野田くん、やさしいところがあるんだなあ。）

と、いがいに思いました。スポーツもとくいで、からだも大きな健一を、希子は、思いがいいしていたようでした。

バスがきました。健一の乗るバスとは行き先がちがうので、希子一人が乗りました。健一がかるく手をあげたので、希子も手をあげてかえしました。

三〇三号室の病室にはいると、おとうさんが輸血をしていました。つりさげられたびんから、ビニールのくだを通り、健康な血が、おとうさんのうでの中に流れこんでいきます。まだからの明るい光線に、くだの血液は、かがやくような赤ぶどう酒色に見えました。

「きようは、ぐあいはどう？」

「ああ、わるくないよ。希子にもめいわくかけて、すまないな。」

希子はベッドの下の木のはこにパジャマをいれてから、いすにこしかけました。

「おとうさんは、けさはひげをそって、さっぱりしたようすです。」

「希子、おとうさんは想像するんだが、この血を日本赤十字に献血してくれた人は、どんな人だと思う？」

希子は、そのむらさきがかって見えるほど、色のこい血を見ながら、だまっていました。

「おとうさんはね、この血をくれた人が、はっきりわかるような気がするんだ。この人は、たくましいうでと、太い指を持っている。その強い手で、工場で働いているんだ。わたしは、その人に心からのお礼をいつている。」

おとうさんは、もう何人もの名まえも知らない人たちから、こうしてたいせつな血をいただいたんだから、なんとしても、また元気にならなくてはね。」

希子は、おとうさんの病気が、白血病という名の病気だときいていました。あまり重くはな